

世界
紀行

アジア・アフリカ・南米を巡り、 大自然と人間に出会った青春一人旅 感動を求め世界へ

後編

杉山大貴 (NI-Youth OB)

サバンナ紀行

ケニアに飛んで野生動物の宝庫マサイマラ国立公園に行った。

野生動物を間近に見て、夜はサバンナのど真ん中にテントを張って寝るというワイルドな日々を過ごした。後で聞いた話によると、夜中にハイエナが僕のテントに近づいてきたことがあり、護衛のマサイ族の人が追い払ってくれたそうだ。

後から語っても冗談にしか聞こえないかもしれないが、事実なのだ。

サバンナではどこまでも平らな草原が広がっているので空間の感覚が麻痺するのかもしれない。おそらくとんでもなく広大な面積なのだろうが時には狭く感じることもあった。例えば木の上に豹が寝ていたり象が歩いていたりするのを、遠くから目を凝らして見ると小さく見えるが、実際に近づいてみると確かに象は大きい。空間感覚が正常に戻るとフィールドの広大さに驚いた。



マサイマラ国立公園のどこまでも平らな大草原

ゲームサファリを繰り返していたある時、僕らのジープの前を突然キリンの親子が横切った。最初は驚いたが、やがて彼らがゆ

っくりと道をわたり終えるのを夢中で見守った。僕らはその光景に息をのんだ。真っ赤な夕陽とキリンが目の前で重なったサバンナは本当に美しかった。大草原ではこんなにもゴージャスでピースフルな時間が突然訪れるのだ。

アラブの民意

イスタンブールに飛んだ。そこでこの町の象徴ともいわれるブルーモスクという建築物に出会った。



イスタンブール、ブルーモスク

昔、オスマン帝国と呼ばれる大帝が存在した。その国はイスラム教社会の連合体でその中心地が現在のトルコ、イスタンブールであり、帝国の繁栄の象徴がブルーモスクであった。

モスクの周りには巨大な鉛筆の様なものが6本も建ててあり、全体を通して完璧に左右均衡を保ったその景観は異様であり壮麗だった。僕はこの旅で初めて自然以外のものに感動を受けた。

イスタンブールである青年と出会った。アフメッドという名の彼はエジプト人の留学生で建築学を学んでいるそうだ。彼とは

宿で仲良くなり、夕飯を共にした時にブルーモスクの歴史等を教えてもらったりもした。

ある時、エジプト人という事もありアラブの春について聞いてみた。すると彼は「ああ、あの時は大変だった。僕の友達も10人殺されたしね。」

とさらっと言った。

僕はしばらく何も言えず、「怖くなかったの？」と聞くと、

「でもやっぱり国が変な事をしたら僕達は立ち上がらなきゃいけないよね。この先僕らの子供や孫が苦しむとわかっていて何もしないなんて出来ないでしょ？」

と、さも何をそんな当たり前の事をといった感じで彼は答えた。

そう言われると確かにそうだ。正直に言って僕はそういう事をあまり考えてこなかったが、彼との出逢いで、危ないとか過激といった偏見を離れてそういう事になる道理を率直に考えられる様になった。

その後、モロッコで抗議デモなども目にしたが、アラブの国の人達の民意の高さというのは凄いと思った。

旅のスタイル

再度アフリカに渡った。

そこでサハラ砂漠と一緒に旅した仲間の中に、一人で旅をしているアメリカ人女性がいて仲良くなった。

女性一人でアフリカを旅していると知った時点で驚きだったが、彼女はまさに素晴らしいトラベラーであった。ここにあるエピソードがある。

その時期のサハラ砂漠は冬で極寒だった。そのツアーでは夜は砂漠にテントで寝るのだが、毛布が薄く寒くてとても眠れなかった。他のツーリストから怒涛の如く文句が飛ぶ。僕はこの状況でどう楽しむかと考え、砂漠の静寂の中で星空を見ることにした。だがテントの近くでは人々の声が聞こえてしまう。しかしあまりテントから離れると

光を失って迷ってしまい凍死の危険が頭をよぎった。

そして出した答えは、朝早く起きてテントの近くで静寂の星空を見ようという事だった。

僕は3時間程寝て翌早朝に起き、無音の音が耳に響く静寂の星空を堪能した。テントへ帰る途中、正面から誰かが歩いてきた。近づくとそれはあの彼女だった。僕以外にもこんな早く起きている人がいるとは正直驚いた。

「凄い星空だったね。何時から外にいたんだい？」

と聞くと、なんと僕より1時間も早く起きていたとのことだ。

僕以外にもこんな早くから起きている人がいるとは。しかも女性一人で。さらに僕より1時間も前から。

その時、僕は彼女こそまさにトラベラーだと思った。



文中の米国人女性とサハラ砂漠にて

その後このツアーでは色々なトラブルがあったのだが、彼女はいつでも文句一つ言わず出来る事を考え行動し確実に旅を楽しんでいた。現地の人や他の旅人とよく会話し、お互いの経験や考えをシェアし合うのが楽しくて仕様がなといった感じだった。

身一つで新たな世界に飛び込んでゆく事への恍惚、高揚感、そういったものが一緒にいて会話していてひしひしと伝わってくる。

逆境すら最大に楽しんでしまう彼女のそ

の精神性にはとても刺激を受けた。

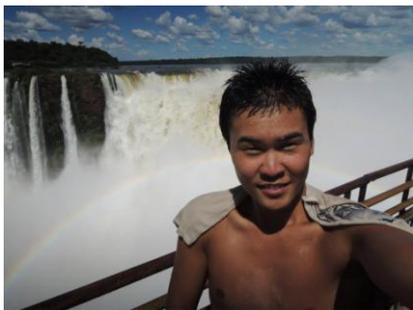
一人旅をする女性とはこうも強く魅力的かと思った。

ビバ！イグアス！！

遂に南米へと降り立った。

世界最大の瀑布イグアスの滝、。ここはアウトドア派の僕には天国だった。とてつもない轟音と共に流れ落ちる、想像を絶する大量の水！その景観はまさに大ヒット映画『アバター』に登場する惑星パンドラの世界の様だった。

悪魔の喉笛と言われるイグアスの滝最大の見所では、視界いっぱいを覆ういくつもの巨大な滝があり、滝壺が見えない程水飛沫を上げ、そこら中に巨大な虹がかかっていた。無論、見学者はみんなびしょ濡れであったが皆笑顔で僕も最高の気分だった。そして、急流をゴムボートで下ったり滝へ突っ込んだり、小さなワニのいる川に飛び込んだりと色々なアクティビティを堪能した。アクティビティごとに出逢う旅人達との会話や冗談がもとても楽しかった。なにしろみんなびしょ濡れだ。なにをやっても楽しい。



イグアスの滝、悪魔の喉笛

イグアスの滝は期待を上回るエキサイティングな名所だった。

感動は突然に

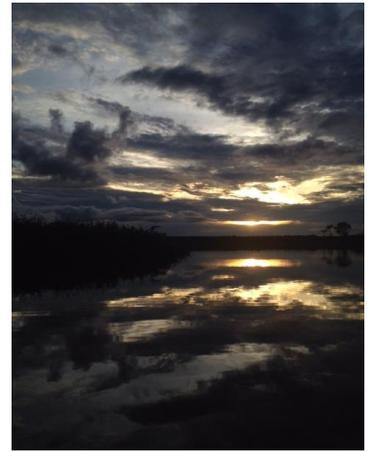
アマゾンのジャングルに行った。

4日間ジャングルの中で生活したが、ここでこの旅一番の感動を味わった。

ある日の夕暮れに男4人ボートでピラニア釣りに出掛けた。全員それぞれ一匹は釣れたので、「腹も減ったし今釣ったピラニアを帰って食べよう！」となり、ボートを漕いでジャングルロッジへと帰る途中だった。

その時僕はぼーっと水平線をただ眺めていた。

ふとボートの前方を見ると一緒に来たデンマーク人の2人がまるで子供の様にアホみたいに鳥の鳴き真似を



アマゾンの夕暮れ

してジャレあっていた。そしてふと空を見上げると黄金色の空に小鳥の家族がゆっくりと目の前を通り過ぎていった。「彼らもこれからエサを分け合って食べるのかな」なんて考えていたら幸福な気持ちに包まれた。そのまま夕空を眺めていたら涙がでた。

そんな幸福な時間がゆっくり流れ、なんだかその場の人達や目に入る動植物、何かが水面をかく音、ジャングルの静かな夕暮れ、全てが愛おしかった。何故それが世界一周全ての中で一番感動したのかはわからない。

それでもボートに乗っている彼らに見られたら、「おーい Daiki！何泣いてんだよ！」とからかわれそうなので涙はすぐに拭いた。

今、旅を終えてふと思い出すと温かい気持ちになる。ああ、あの時本気で旅したな～って、なんだかほっこりする。

感動を追い求め、世界をまわったこの旅の思い出と経験は僕の人生の宝物だ。

(旅程 2013 年 10 月 3 日～2014 年 1 月 21 日)

旅の舞台（後編）

